

## 岩手の風土記シリーズ（18） ザシキワラシ

昨年新型コロナウイルス発生の折、巷で一躍脚光を浴びたのが妖怪「アマビエ」である。

この妖怪は熊本県出身で、江戸時代後期に当時の瓦版で「病気が流行したら自分の姿を写して人々に見せるように」と伝えて海中に消えたと伝えられていて、昨年日本政府の公認キャラクターにもなった妖怪である。年が明けて新型コロナウイルスが日本で発生してから1年がたつが、いまだにその猛威は続いていて、アマビエにはまだまだ居続けてもらわないと困る状況下にある。ところで「妖怪」と「幽霊」の違いはご存じで



【アマビエ】

あろうか？「妖怪」とは日本で伝承される民間信仰において、人間の理解を超える奇怪で異常な現象や、あるいはそれらを起こす、不可思議な力を持つ非日常的・非科学的な存在のこと。妖（あやかし）または物の怪（もののけ）、魔物（まもの）とも呼ばれる。では「幽霊」とは死んだ者が成仏できず姿を現したものであるいは、死者の霊が現れたもので、いわゆる凄惨なもの代表格でどこかおどろおどろした印象がある。これに対して「妖怪」は人に対してちょっとしたいたずらをして喜んでいるとか、どこか憎めないようなところがあり、「アマビエ」のように人を加護する妖もいれば、その存在を見る人に良い影響を与える存在までいる。その代表格が「ザシキワラシ」である。古くから岩手県や青森県の南部（南部藩）を中心に



【ザシキワラシ】

に伝わる子供の姿をしている 精霊的な存在とされ、住みついた家や、目撃した者に大変な幸運をもたらす存在として伝えられている。2012年に公開された水谷豊主演の「HOME 愛しの座敷わらし」でも幸運を呼ぶ妖として登場し、子供にしか見えない存在であった。そしてこのザシキワラシの伝説は、柳田國男の「遠野物語」でも紹介されている。以下にその一端を紹介しよう。「むがしあつたずもな、村の旧家にはよくザシキワラシがいるという、子どもの姿をした神様だが、この神様がいなくなるとその家は衰えるといわれている。上閉伊郡土淵村（現遠野市）のある家にもザシキワラシがいた。この家はこの辺りの草分けで、代々孫左衛門となる豪商であった。最後の孫左衛門は、村では珍しい学者で、京都から様々な文献を取り寄せて勉強していた。そのうち孫左衛門はお稲荷様を信仰しだして、庭に祠を立て、伏見稲荷神社から御神体と正一位の神階を受け、その祠に祀り、毎日油揚げを欠かさずお供えしていた。そしていつしか、祠の下にキツネが住み着くようになり、ますます熱心にお稲荷様を信仰するようになった。ある日の夕方、村の一人の老人が村はずれの橋にきたとき、村の方から二人の女の子が歩いてきたので、老人が声をかけた。『おめだづ、どごがらきた？』すると一人のむすめっ子が『おら、孫左衛門の家から来た』と

いう。『それが、して今から、どごさいぐどこや?』と、すると『和野さいぐ』とポツリと答えて行ってしまった。老人は、いまのは孫左衛門のところのザシキワラシでなかったかとふと考え、そして孫左衛門の家も長くはないなと思ったそうだ。孫左衛門の家は、家族や下男下女合わせて20人を超える大所帯であった。ある時庭のナシの木の周りに大きなキノコが生えているのを下男が見つけたので、食べられるかどうか言い争っていることを孫左衛門も聞きつけ、早速お稲荷様にお伺いを立てると、『食わぬがよし』という方がでた。ところが一人の下男が、苧殻（オガラ）と一緒に洗えば毒に当たらないという迷信を信じ、その通りにして食べてしまった。あまりに美味しそうに食べるので孫左衛門も一口たべてしまい、結局、家の者全員が食べてしまった。それからしばらくして、にわかには苦しき始め、家の者全員がもたえ苦しき死んでしまったそうだ。後にかの老人からザシキワラシの話を聞いた村人は互いに頷きあつたそうなの。現在はこのような不運な話ではなく、ザシキワラシを見ることで幸運が舞い込むという伝説が人々を魅了している。岩手にはザシキワラシを見ることができるといふ代表的な場所がいくつかあるが、今回はその代表的な所を紹介しよう。まず二戸市金田一温泉にある温泉旅館



【亀磨君】

「緑風荘」である。この旅館には「亀磨（かめまる）」というザシキワラシがいるという。数年前にこの旅館が火事になったが、亀磨はすぐ後ろの亀磨神社に逃げ延びて無事であり、



【緑風荘】



【緑風荘の本館】

本館が建て替えられたときに戻ってきたということである。取材に行った日は、たまたま休日で旅館の中には入れなかったが、外観だけでもと許可を得て、撮影をしてきた。中に入ればザシキワラシが現れるという「槐（えんじゅ）の間」も見ることができそうなの。温泉宿なので日帰り入浴もできるようだ。この緑風荘のザシキワラシの由来はおおよそ以下のようなの。約670年位前の南北朝時代、当家の先祖である藤原朝臣藤房(万里小路藤房)は、南朝の後醍醐天皇に仕えていた。しかし、南北朝戦争において南朝は敗北し、北朝の足利軍に追われながら北上を続け、岩手県二戸市にたどり着いた、道中、二人連れていた子供の内、当時6歳だった兄の亀磨が病で倒れ幼き生涯を閉じた。その際『末代まで家を守り続

ける』と言って息を引き取ったそうだ。その後、守り神〈ザシキワラシ〉として奥座敷の槐(えんじゅ)の間に 現れるようになったといわれている。



【亀磨神社】



【金田一温泉まんじゅう】

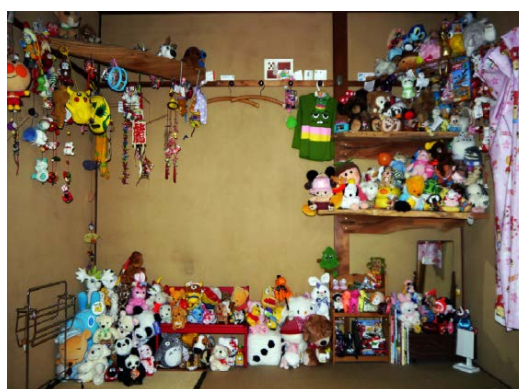
またひとたびザシキワラシに気に入られると、どこであろうとザシキワラシが会いに来てくれるそうだ。旅館の敷地内には亀磨神社が直ぐ後ろにあるが、外部からだ少し遠回りに歩かなければならない。さらに 最近では、このザシキワラシの亀磨君は、金田一温泉街の旅館等をハシゴして歩くという噂もちら

ほらと聞いた。いずれにしても、緑風荘は数年先まで予約で一杯とのことらしい。次に盛岡市にあるザシキワラシの出るという旅館を紹介しよう。盛岡二高近くにある、「旅館 菅原別館」である。この菅原別館では、以下のような由来があるという。大女将の実家は、江戸時代より三百数十年にわたり旅館(本陣)を営む一族であった。代々この家より出た者は、皆東北各地にて旅館を創め、そして大女将もこれに倣い、この盛岡の地にて旅館を営んでいた。(現在は一族最後の旅館との事)大女将の実家には家の中に代々火の神様が村の鎮守として祀られていた。この火の神様はザシキワラシでもあるという。ザシキワラシは火事の前触れを教えるといい、またこの炎を防ぐ力があるとされ、江戸時代の大火事で村の大半が消失してしまった時も、実家は炎に囲まれたにもかかわらず、火の神様(ザシキワラシ)のおかげで火事を免れる事ができたそうだ。このザシキワラシが大女将



【菅原別館】

の嫁入り当時についてきて、宿泊しているお客様の前に時折現れるようになったとの事だ。まだ筆者も足を踏み入れていないが、一度はのぞいてみたいと考えている。最後は遠野に



【ザシキワラシの部屋】

ある「民宿わらべ」である。ある人の知人が東京から子供連れで遠野に遊びに来た。この時その子供は「ザシキワラシ」を調べたいということであった。遠野郷を一巡りしてからこの民宿わらべに宿を取ったところ、翌朝そのこどもが興奮して、「昨晚ザシキワラシが来たよ」と言って大変喜んでくれたという記述をみた。このように、ザシキワラシは純粋な心を持っている、子どもにしか見えないという説もある。邪心にまみれた筆者などは、ザシキワラシは巡り合えそうにもないかも？しかし、「新日本風土記」というTV番組の中で、遠野のとある廃校をたまたま車で通ったご婦人が、廃校の教室に着物を着た子供を二人見て、話しかけたという事もあるそうだ。さらに遠野では早池峰神社でも運が良ければザシキワラシに合うことができるかもしれない。実は早池峰神社はその山麓に4か所あり、遠野側にある早池峰神社がパワースポットとして最近脚光をあびつつあり、その一つがザシキワラシであるのかもしれない。



【遠野早池峰神社】

ここにもまだ足を向けていないが、コロナ騒ぎが落ち着いたら是非にも行ってみたいスポットである。またザシキワラシにはいろいろな説があり、間引かれた子供の霊とか、カップアの化身とか、いろいろな説が存在する。またその呼び名も「座敷童（わらし）」、「座敷童衆」、「座敷ぼっこ」、「御蔵ボッコ」、「座敷小僧」、「カラコワラシ」など、地方によって様々な呼び方があるようだ。これらを調べるだけでも大変な作業になりそうだ。また面白いことに東北地方各地に「ザシキワラシ」の伝説が伝えられているが、秋田県にはそのような伝承は少ないという。これは、秋田には三吉鬼（さんきちおに）伝説があり、この三吉鬼が下等なザシキワラシを秋田に入れなためといわれているそうだ。いずれ皆さんも時間が許せば、ザシキワラシ伝説をめぐり、近くは盛岡、あるいは二戸の金田一温泉、もしくは遠野の早池峰神社を訪ねて、ザシキワラシのロマンを夢見て、その息吹を感じてみてはいかがでしょう。もしかすると、なにか用かい（妖怪？）と言って、肩をたたかれるかもしれないですよ！

#### 参考資料

- ・ 深沢紅子・佐々木望編 新版日本の民話2 岩手の民話 未来社
- ・ 二戸市観光協会発行パンフレット
- ・ 緑風荘 HP
- ・ 菅原旅館 HP
- ・ 情報紙 シニアズ